

## 第三章

# 地名の由来・伝承

大口町域に存在する地名について、承平年間（九三一～九三八年）に成立したといわれる『倭名類聚抄』（わみょうるいじゆしやう）に、「尾張国丹羽郡小口郷」と確認できる。以降、各時代の記録類には村名の表記は確認できるが、村内の詳細な地名は記録として残されていない。しかし、江戸時代に入ると、絵図などの史料より、村名だけでなく、各村内の土地に対する地名（小字名）まで把握することができる。

そして明治時代に入り、一八七八（明治十一）年の郡区町村編制法施行時の町域内では、小口村・豊田村・秋田村・大屋敷村・河北村・外坪村・余野村があり、豊田村・秋田村以外は施行前から使われてきた村名であった。これらの村名は、一八八九年に富成村・小口村・太田村の三村に統合された際に大字名となった。これは一九〇六年に三村が合併し、大口村となった後も大字名として残り続けた。

小字名は、江戸時代の史料で把握できるものに加え、明

治時代の史料で新たに確認できるものもある。なお、江戸時代における史料に記載されている小字名が、場所によって詳細に設定されていた理由として、その土地から年貢を取るため、戦国時代の検地、古代の律令制度を起源とするなど様々な説がある。

大口村成立後、全域にわたる地名の変更は、一九七八（昭和五十三）年から始まる字区域の境界変更及び名称変更となる（第四編第二章）。

本章では、大字・小字ともに、地名がどの時代の史料で確認できるかにも焦点をあてつつ、それらの由来・伝承を記述する。記述にあたっては、江戸時代後期（一八四〇～五〇年代）に描かれた徳川林政史研究所蔵の村絵図（以下「村絵図」）、『寛文村々覚書』（一六七〇年前後に成立）、『尾張御行記』（しゅんこうき）（一八二二（文政五）年成立）、愛知県公文書館所蔵の一八八四年の地籍図、『大口村誌』（一九三五年刊

行)、『五十年の歩み』(一九五六年刊行)、『大口町史』(一九八二年刊行)、地名辞典などを参考にした。

また、村絵図に旧小字名として使われてきた地名は、江戸時代の村絵図で確認できる地名、村絵図に記載がなく、一八八四年の地籍図に記載のあるものは明治時代の地籍図で確認できる地名とし、明治時代に確認できる地名は、江戸時代の村絵図ではどのような地名であったのか把握できる範囲で記載する。由来については、文末に出典を記載し、出典のないものは地元の伝承からである。

各地区ごとに地名を列挙するにあたり、江戸時代に村名であり、明治時代に大字となった地名、昭和期の名称地番変更により新しく付けられた町名、明治時代以降に地名として残らなかったが、各地区においては慣習的に使用されている通称名、名称地番変更前まで使用されていた小字名に分類する。小字名の読み仮名は、『大口町史』の小字名一覧に掲載したものをそのまま付す。各地名の位置については、第四編第二章に掲載した地区ごとの地図を参照していただきたい。

## 第一節 秋田

(4-2-3 秋田地区名称地番変更図)

### ○大字秋田(あきた)

一八七八(明治十二)年の郡区町村編制法により秋田村が誕生し、一八八九年、太田村の大字となる。湿地・低地を示すアクタ(芥)、アクツ(阿久津)(『日本の地名』が転じてアキタ(秋田)となる(『大口町史』)。

### ○町名

秋田 「大字秋田」参照。

### 伝右(でんね)

江戸時代前期、庄屋の伝右衛門の六代前の先人が、安良村(現江南市安良)から移り住み、田畑を開墾し入鹿伝右衛門新田という集落が成立した。この伝右衛門の略語として、「伝右(デンネ)」と呼ぶようになったと言われている。名称地番変更により町名となった。

### 替地(かえち)

江戸時代前期、入鹿長桜替地新田は、紀伊藩の浪人が

長桜の土豪を頼って長桜村南辺を開発したが、同地が犬山城主成瀬氏領であったため、小口村にあった尾張藩領の一部と交換したという伝承がある。この経緯が村名の由来となり、替地と呼ばれるようになった。

### ○通称名（集落）

#### 長桜（ながさくら）

伝承では二説ある。一つは、奈良から皇族ゆかりの人が天神を背負い、桜の枝を杖としてやって来た。この杖を桜塚に立てておいたのが発芽し、それから八重と一重の二つが開花したという。このことから奈良桜村といい、転じて長桜村になった。もう一つは、正字が「長狭倉」で、木曾川の支流と入鹿池からの水路に挟まれた南北に長く小高い土地を意味する。桜塚の因縁をもって「長桜」となったと信ずるものが多いとされる（『大口村誌』）。

#### 八左（はちざ）

入鹿八左衛門新田の庄屋、八左衛門が縮まり「八左（ハチザ）」と呼ばれるようになった。

#### 宗雲（そううん）

庄屋常右衛門の七代前の先祖が開墾した。奥州から来た小笠原宗雲が家来の左右田弥次右衛門、佐竹左太夫に開墾させたことから、入鹿宗雲新田となり、集落名を宗雲と呼ぶようになった。庄屋常右衛門は、佐竹左太夫の末裔である。宗雲は南北に広く、南屋敷・中屋敷・北屋敷と三区に分けていた（『尾張御行記』）。

### ○通称名（地域）

#### ヒバシリ

秋田一丁目（旧大屋敷寺東と秋田字東敷山の境あたり）の用水に折れた石橋があり、夜になるとこの橋から火が走ったというので、火走り橋の名がついた（『大口村誌』）。これが転じて、近隣の住民はこの周辺を「ひばしり」と呼んでいる。別に、秋の野焼きの際、夕暮れ時に伊吹きおろしで残り火が立ち、東方向へ火が走るように燃え移る様子から「火走り（ヒバシリ）」と呼ぶようになったとも伝えられる。

#### ハラ

伝右二丁目と秋田二丁目の境にある「字中原」あたりの地域を「ハラ」と呼ぶ（伝右二丁目「中原」参照）。

## 【旧小字名】

## ○伝右二丁目

## 五反田(ごたんだ)

江戸時代の村絵図で確認できる。五反を一区画とする田地の意味(『地名の研究』)。北に隣接する下小口に「下五反田」の小字名あり。

## 壺丁田(いっちょうだ)

江戸時代の村絵図に「壺町田」とある。丁は町の当て字。一町を一区画とする田地の意味(『地名の研究』)。

## 西壺丁田(にしいっちょうだ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の「壺町田」を明治に入り「壺町田」と「西壺丁田」に分割。

## 屋敷(やしき)

一八八四年の地籍図で確認できる。村絵図に「伝右衛門新田郷立」とあり、集落があったことを示すため、明治に入り「屋敷」としたと考えられる。

## 郷裏(ごうら)

江戸時代の村絵図に「字郷うら」とある。郷は集落、裏は北側の意味で伝右集落の北の意味。

## 郷西(ごうにし)

江戸時代の村絵図で確認できる。郷は集落の意味で、伝右集落の西の意味。

## 樋田(といだ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代は「大原」と確認できる(「村絵図」)。東に接する梶田の意味と、樋の字から、この地が用水から水を引くことに関連してつけられたと考えられる。

## 梶田(かじた)

《名称地番変更により下小口から伝右二丁目に》

江戸時代の村絵図で確認できる。のち小口字梶田となり下小口地区内であったが、名称地番変更による区域変更で秋田地区に。水路に接しており、用水路の分岐する場所「カジを切る」の意味でついた。また、神に捧げる木として神社の境内に植えられるなど神事との関連が強いカジノキが多くあったからとも伝えられる。

## ○伝右二丁目

## 畦知野(あぜちの)

江戸時代の村絵図に「字あぜちの」と確認できる。アゼは、浅い川のほとりの意味があり(『日本の地名』)、

村絵図にも二筋の水路ぞいに立地している。

### 八反田(はったんだ)

江戸時代の村絵図で確認できる。八反を一区画とする

田地の意味(『地名の研究』)。

### 大原(おおはら)

江戸時代の村絵図で確認できる。

### 向山(むかえやま)

江戸時代の村絵図で確認できる。伝右の集落から見ても、微高地であることが由来と考えられる。村絵図でも畑と田の両方が見られる。一九七八(昭和五十三)年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

### 中原(なかはら)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代は、「下原」(「村絵図」)。明治に入り、「下原」から「中原」に改めた。地元の通称名では、この地の集落を「ハラ」と呼ぶ。

### 髭田(ひげた)

江戸時代の村絵図に「字ひげ田」とある。水引のヒキ、ヒクにヒゲをあてたもので水がよく流れ込む田の意味を表している(『大口町史』)。

### ○秋田一丁目

#### 米野(こめの)

秋田二丁目「米野」参照。

#### 西廻間(にしはざま)

江戸時代の村絵図で確認できる。村境は西北にあり、川と水田にはさまれた狭い範囲を示す(『大口町史』)。

#### 六反田(ろくたんだ)

江戸時代の村絵図で確認できる。六反を一区画とする田地の意味(『地名の研究』)。

#### 村北(むらきた)

江戸時代の村絵図で確認できる。地名ではあるが、名称地番変更前の「字村北」と「字勝負山」は、村絵図では「中山」に含まれ、「字中山」と「字南山」の「居屋敷(集落)」の北に狭い範囲で「字村北」と確認できる。

#### 勝負山(しょうぶやま)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「中山」に含まれている(「村北」参照)。土地争い、境界争いがあると、新たな地名に「勝負」の文字が入る例が多い(『大口町史』)。

## 西中山（にしなかやま）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「中山」の範囲が広く、中山の西端を明治に入って「西中山」とした。

## 川原ヶ田（かわらけだ）

江戸時代の村絵図で確認できる。村絵図では「河原田」としている。

## 屋敷越（やしきごし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、同地を「八左衛門新田 居屋敷」としている。『尾張洵行記』に、長桜村からここに移り開墾したとある。長桜の「居屋敷」から越してきたと考えられる。

## 藪山（やぶやま）

江戸時代の村絵図で確認できる。明治に入り「東藪山」・「柳原」・「宮浦」・「西藪山」に分かれた（第四編第三章第二節奈良子二丁目「藪山」参照）。

## 東藪山（ひがしやぶやま）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の「藪山」の一部で、東に位置する。

## 宮浦（みやうら）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の「藪山」の一部で、浦は裏のあて字で天神社の北の意味。

## 柳原（やなぎはら）

《名称地番変更により奈良子二丁目へ》  
一八八四年の地籍図で確認できる（第四編第三章第二節奈良子二丁目「柳原」参照）。

## 西藪山（にしやぶやま）

《名称地番変更により奈良子二丁目へ》

一八八四年の地籍図で確認できる（第四編第三章第二節奈良子二丁目「藪山」参照）。

## ○秋田二丁目

## 米野（こめの）

江戸時代の村絵図で確認できる。『尾張洵行記』にある宗雲の北屋敷にあたると考えられる。

## 村北

秋田一丁目「村北」参照。

## 山神前（やまがみまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図にある「字六反田」の南西端に「山の神」の記載があ

り、明治に入りその南を「山神前」とした。

### 法徳寺（ほうとくじ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代は村絵図にある「中山」の一部であった。窪んだ地形を表す女性の陰部（ホト）に好字である法徳の文字をあて、寺は地の借字とされる（『大口町史』）。

### 中山（なかやま）

江戸時代の村絵図で確認できる。東端に「居屋敷」とその北に「宮」とあることから、『尾張徇行記』にある宗雲の中屋敷と権現社にあたりと考えられる。一九七八年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

## ○秋田三丁目

### 宮前（みやまえ）

江戸時代の村絵図で確認できる。天神社境内地とその南側を呼ぶ。

### 宮東（みやひがし）

江戸時代の村絵図で確認できる。天神社の東側の地。なお、村絵図には字名はないが「居屋敷」が密集していることがわかる。

### 村東（むらひがし）

江戸時代の村絵図で確認できる。宗雲南部に位置する「字南山」の集落の東を表している。一九七八年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

### 南山（みなみやま）

江戸時代の村絵図で確認できる。『尾張徇行記』にある宗雲の南屋敷にあたりと考えられる。

### 村西（むらにし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図で「字兎」の一部であったと考えられる。宗雲南部に位置する「字南山」の集落の西を表している。

### 西川原（にしかわはら）

江戸時代の村絵図で確認できる。

## ○秋田四丁目

### 大樋（おおひ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図にある「字森上」周辺と考えられる。一九七八年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

### 天王（てんのう）

江戸時代の村絵図で確認できる。東に津島神社があり（小牧市内）、祭神の牛頭天王からといわれている。一九七八年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

#### 兎（うさぎ）

江戸時代の村絵図で確認できる。砂地の意味を持つウタ・ウサ（『日本の地名』）が転じてウサギとなった（『大口町史』）。

#### 北替地（きたかえち）

江戸時代の村絵図で確認できる。入鹿長桜替地新田において最初に開墾した土地。

#### 三町野（さんちよの）

江戸時代の村絵図で確認できる。三町を一区画とする田地の意味（『地名の研究』）。

#### 清水（しみず）

一八八四年の地籍図で確認できる。矢戸川右岸沿いにあたり、豊田地区御供所三丁目地内まで続いている（第四編第三章第二節御供所三丁目「清水」参照）。

### ○替地二丁目

#### 西郷前（にせこうまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。郷は替地集落、前は南を示す。江戸時代の村絵図では「森上」にあたる。

### ○替地二丁目

#### 東郷前（ひがしごうまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。郷は替地集落、前は南を示す。江戸時代の村絵図では「森上」にあたる。なお、他の村絵図には「森上」の東に「郷東」とある。

### ○替地三丁目

#### 東八丁（ひがしはっちよう）

江戸時代の村絵図では、「八町野」とある。明治時代以降は「東八丁」と表記。

#### 西八丁（にしはっちよう）

江戸時代の村絵図では、「西八町野」とある。明治時代以降は「西八丁」と表記。



## 第二節 豊田

(4-2-4 豊田地区名称地番変更図)

### ○大字豊田(とよた)

一八七八(明治十一)年の郡区町村編制法により、豊田村とつけられ、のち太田村の大字となる。ホタ、トダ(ドタ)が湿地、湿田の意味があり、ホタ、トダに豊の字をあて、水田耕作に適した湿潤なこの地を豊田とした(『大口町史』)。

### ○町名

豊田 「大字豊田」参照。

### 奈良子(ならし)

平らにする意味の他動詞「均す」<sup>なむ</sup>「平す」<sup>なら</sup>の名詞形が「ナラシ」であり、平坦な土地の意味。子は地の意味を表す(『大口町史』)。伝承では、奈良から来た小森三象という人が奈良子の開発人であり、この地名も小森三象の命名とある。奈良子に大森が多いのは、この小森の一族が次第に増えたために、小森を転じて大森とし

たのだという。開発者小森三象は九〇二(延喜二)年一月二日に亡くなった(『大口村誌』)。

### 堀尾跡(ほりおせき)

八剣社<sup>はっけんしゃ</sup>の境内地が、松江城と城下町を築いた戦国武将堀尾吉晴をはじめとした堀尾氏の邸宅跡であり、のちに小字名で使われていたが、名称地番変更で町名として残された。

### 御供所(ごごじよ)

江戸時代には御供所村と称し、『尾張徇行記』<sup>じやんこうき</sup>によると、熱田神宮にお供えを献上しているため、この名がついたと書かれている。別に大縣神社<sup>おおあがた</sup>(二之宮)にお供えを献上しているからとも伝えられている。

### ○通称名(集落)

### 小折新田(こおりしんでん)

豊田地区の南部、豊田一丁目から三丁目にかけては、江戸時代に「小折入鹿出新田」と呼ばれていた。このことから、行政上の正式な地名としては残らなかったが、集落の地名として「小折新田」と呼ばれている。

### 東奈良子・西奈良子(ひがしならし・にしならし)

『寛文村々覚書』に、御供所村の枝郷の集落名で「奈良師」と記載される。『尾張徇行記』では、幼川（現五条川）の南側を「東奈良師」、北側を「西奈良師」とある。明治時代以降は「師」から「子」と表記は変わり、東奈良子・西奈良子と呼ばれる。

### 【旧小字名】

#### ○奈良子一丁目

#### 大屋敷前（おおやしきまえ）

江戸時代の村絵図で確認できる。大屋敷本郷の南側に隣接する土地のため名付けられたと考えられる。

#### 流シ（ながれ）

一八八四年の地籍図で確認できる。大屋敷「下流」の南側に隣接し、西境に水路（現昭和用水）があることに由来すると考えられる。一九八一（昭和五十六）・一九八六年の境界変更により一部を江南市へ編入した。

#### 薬師裏（やくしうら）

一八八四年の地籍図で確認できる。『大口村誌』に一七三八（元文三）年秋、村人の安静を祈念し、鬼門にあたる位置に薬師堂を建て、一八八八年頃、東奈良子地

蔵寺（秋葉三尺坊）内に移転したとある。

#### 鹿ノ戸（かのと）

江戸時代の村絵図に「字カノド」とある。他の村絵図では「鹿野戸」。カノは畑、トは所の意味（『日本の地名』）。

#### 差柳（さしやなぎ）

江戸時代の村絵図で確認できる。苗代の水口の両側に柳の小枝をたてた農耕儀礼に因む地名（『大口町史』）。

#### 奈良子（ならし）

小字名としては、一八八四年の地籍図で確認できる。集落名としては、『寛文村々覚書』に確認できる（町名「奈良子」参照）。

#### 東池尻・中池尻・西池尻（ひがしいけじり・なかいけじり・にしいけじり）

江戸時代の村絵図に「字池尻」とあり、明治時代の地籍図には東・中・西の三つの小字に分けられている。尻とは下部、底面の意味で、昔は池であったことを示すものと考えられる。この地に接する江南市安良にも池尻の地名があり、かなり広い湖沼であったと考えられる（『大口町史』）。一九八一年の境界変更により、一

部を江南市から編入した。

### 長楽寺(ちょうらくじ)

江戸時代の村絵図で確認できる。『尾張徇行記』では、一四八四(文明十六)年に桂林和尚の開基でこの地に長楽寺が造られたとある。別に、五条川と昭和用水との合流する地で、洪水のときよく流れる田地であるためナガレ(流れる)の意の「ナガレジ」(流れ地)に好字の長楽寺をあてた(『大口町史』)。一九八一・一九八六年の境界変更により一部を江南市へ編入した。

### ○奈良子二丁目

#### 若森(わかもり)

江戸時代の村絵図で確認できる。

#### 藪山(やぶやま)

江戸時代の村絵図で確認できる。江戸時代には、秋田村から豊田村にかけて五条川沿いの広範囲に「字藪山」があつたが、明治に入り細分化され、秋田一丁目地内には「字藪山」・「字東藪山」、奈良子二丁目地内に「字藪山」・「字西藪山」がそれぞれ成立した。

#### 東奈良子(ひがしならし)

一八八四年の地籍図で確認できる(奈良子一丁目「奈良子」参照)。

#### 柳原(やなぎはら)

《名称地番変更により、大字秋田から奈良子二丁目に》  
一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の「藪山」の一部。

#### 西藪山(にしやぶやま)

《名称地番変更により、大字秋田から奈良子二丁目に》  
一八八四年の地籍図で確認できる(「藪山」参照)。

#### 長淵(ながぶち)

《名称地番変更により、高橋一丁目へ》  
一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、五条川沿いの「字若森」・「字高橋東」北端。

### ○奈良子三丁目

#### 善鋤(ぜんくわ)

江戸時代の村絵図に「字ゼンコハ」とある。クワには際(きわ)の意味がある(『日本の地名』)。

#### 山根(さんね)

一八八四年の地籍図で確認できる。

寺東(てらひがし)

一八八四年の地籍図で確認できる。桂林寺の東に隣接するため名付けられたと考えられる。

○堀尾跡二丁目

堀尾跡(ほりおせき)

町名「堀尾跡」参照。

石河原(いしかわはら)

一八八四年の地籍図で確認できる。河川改修前は五条川右岸のみの小字であった。

東屋敷(ひがしやしき)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「居屋敷」が描かれている。

○堀尾跡二丁目

堀尾跡(ほりおせき)

町名「堀尾跡」参照。

○御供所二丁目

西屋敷(にしやしき)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「居屋敷」が描かれている。北端の五条川沿いは村絵図の「字早稲田」あたり。

西河原(にしかわはら)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「居屋敷」が描かれている。北端の五条川沿いは村絵図の「字早稲田」あたり。

南屋敷(みなみやしき)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「居屋敷」が描かれている。北端の五条川沿いは村絵図の「字早稲田」あたり。

小皿(こざら)

江戸時代の村絵図で確認できる。

○御供所二丁目

宮前(みやまえ)

江戸時代の入鹿長桜替地新田の村絵図に、水路の続く先として御供所村「字宮前」とある。八剱社の南に位置するため名付けられたと考えられる。

東屋敷(ひがしやしき)

堀尾跡一丁目「東屋敷」参照。

### 度々目利(どどもり)

江戸時代の村絵図で確認できる。他の村絵図には「字ドドメキ」と記されている。

### 山神(やまがみ)

一八八四年の地籍図で確認できる。二〇二二(令和五)年現在も、山の神が祀<sup>まつ</sup>られている(第三編第三章第一節)。江戸時代の入鹿九郎右衛門新田の村絵図にある

「居屋敷」にあたる。

### 南野(みなみの)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字成兼」の西側あたり。

## ○御供所三丁目

### 笹折(ささおり)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字大笹前」のあたりと考えられる。

### 追分(おいわけ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字東手」のあたりと考えられる。

### 樹木(じゅもく)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字東手」のあたりと考えられる。

### 矢崎野(やざきの)

江戸時代の村絵図で確認できる。他の村絵図では「矢先埜」とある。入鹿三右衛門新田の集落が存在した土地と考えられる。

### 三町野(さんちようの)

江戸時代の村絵図に「字三町」と確認できる。隣接する秋田四丁目の「三町野」と同一であったと考えられる(第四編第三章第一節秋田四丁目「三町野」参照)。

### 給田(きゆうでん)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字三町」の西、「字三反田」あたりと考えられる。江戸時代では各藩から藩士に与えた知行地のことを給田又は給地といった(『大口町史』)。

### 大牧(おおまき)

江戸時代の村絵図で確認できる。

### 清水(しみず)

一八八四年の地籍図で確認できる。入鹿長桜替地新田

から矢戸川右岸沿いに続く。三町野の南側で清水が湧き出たことによる（第四編第三章第一節秋田四丁目「清水」参照）。

#### 藤ノ木（ふじのき）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字久八東」のあたりと考えられる。

#### 榎坪（えのきつぼ）

江戸時代の村絵図で確認できる。水田灌漑用の細い水路を「えぎ」と昔は呼び、その「えぎ」がある田の区域という意味が榎坪となった（『大口町史』）。なお、エギには「縁」の意味もある（『日本の地名』）。

#### 高場（たかば）

江戸時代の村絵図に「字タカバ」と確認できる。一八八四年の地籍図では「鷹場」、『大口村誌』には「高場」、一九三八年の公図では「鷹場」とある。

#### 茨島（いばらじま）

江戸時代の村絵図に「字いばらじま」と確認できる。他の村絵図にも「字いばら嶋」と記されている。

#### ○豊田一丁目

##### 南野（みなみの）

御供所二丁目「南野」参照。

##### 白木（しらき）

江戸時代の村絵図で確認できる。他の村絵図には「志らき」と表記されている。

##### 西成兼（にしなりかね）

江戸時代の村絵図に「字成兼」と確認できる。他の村絵図には「なりか年」と表記されている。明治時代以降は東成兼と西成兼に分けられる。江戸時代、田畑から上納する年貢以外の税の総称を小物成箇こものなりかといい、一定の年貢のほか雑税を納めることが義務づけられていたことによる地名（『大口町史』）。

##### 白亀（しらがめ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字白木」に含まれると考えられる。

##### 平田（ひらた）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「成兼」の南側に該当すると考えられる。

##### 霞野（かすみの）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「成兼」の南側に該当すると考えられる。一九七一年の境界変更により一部を江南市へ編入した。

#### 小淵(こぶち)・仏塚(ぶつきづか)

一九七一年の境界変更により、一部を江南市から編入した。

#### ○豊田二丁目

##### 東成兼(ひがしなりかね)

豊田一丁目「西成兼」参照。

##### 福田(ふくた)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代、小折入鹿出新田の「居屋敷」があり、村人の氏神として鎮座した大福田社から小字名が付けられたと考えられる。

##### 中切(なかぎり)

一八八四年の地籍図で確認できる。

##### 二見(ふたみ)

一八八四年の地籍図で確認できる。一九七一年の境界変更により一部を江南市へ編入した。

##### 二子(ふたご)・八反田(はったんだ)

一九七一年の境界変更により、一部を江南市から編入した。

#### ○豊田三丁目

##### 大山(おおやま)

江戸時代の村絵図で確認できる。他の村絵図に道の続く先として御供所村「字大山」と記載されている。

##### 水戸先(みとさき)

一八八四年の地籍図で確認できる。

##### 狭間(はざま)

一八八四年の地籍図で確認できる。

##### 矢戸(やど)

一八八四年の地籍図で確認できる。矢戸川沿いにあたる。江戸時代の村絵図では「字雉子野」に該当すると考えられる。

##### 野田(のだ)

江戸時代の村絵図に「字埜田」と記載されている。明治時代以降は「野田」と表記されている。

##### 傍示(ぼうじ)

江戸時代の村絵図に「字ホラジ」と確認できる。明治

時代以降は「字傍爾」のち「字傍示」と表記されている。傍示とは標示のことで、村境に立て境界を示す傍示木のことをいい、村境にある土地とか、村境の標のある土地の意味（『大口町史』）。

#### 松下（まつした）

一八八四年の地籍図で確認できる。

#### 雉子野（きじの）

江戸時代の村絵図に「字雉子埜」と記載されている。明治時代以降は「字雉子野」と表記される。一九七八年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

#### 下田（しもだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。

#### 花見塚（はなみづか）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の入鹿長桜替地新田の村絵図に「字花塚」と記載されている。「花」は、ハシ（端）を意味し、「見」は場所を表す接尾語のことで、「塚」は二子山（古墳）に因んだものと考えられる（『大口町史』）。一九七一・一九八一・一九八六年の境界変更により一部を江南市へ編入した。

## 第三節 大屋敷

（4-2-5 大屋敷地区名称地番変更図）

### ○大字大屋敷（おおやしき）

江戸時代の村絵図に「大屋敷村」と確認でき、文字どおり大きな屋敷があったからではなく、いくつかの屋敷が集まっている「多くの」という意味で、一つの屋敷を指したものと考えられる（『大口町史』）。「おおやしき」を縮めて「おやしき」と呼ぶ慣習がある。

### ○町名

#### 大御堂（おおみどう）

『寛文村々覚書』に、「枝郷 高橋 大御堂」と記載されている。明治時代に小字名となり、名称地番変更以降も残る。元々「おおみどう」を縮めて「おみど」と呼ぶ慣習があり、二〇二三（令和五）年現在、住所表記自体が「おみど」となっている。

#### 丸（まる）

江戸時代の村絵図では、幼川（現五条川）沿いに「中なか



嶋佐兵衛佑城跡しまさひょうゑのすけ」と書かれた範囲があり、その南西に隣接して「字丸の内」、北西に隣接して「字丸裏」と確認できる。名称地番変更時に、この地が下小口地内となり、地名は西側にあたる新境界の範囲内に「丸」を残した。城や砦とりでを意味するマルは、韓国語のBORUが転じて使われるようになった（『愛知の地名』）。

大屋敷 「大字大屋敷」参照。

高橋（たかはし）

『寛文村々覚書』に、「枝郷 高橋 大御堂」と記載されている。明治時代に小字名となり、名称地番変更時に町名となった。ハシは階（キザハシ）のハシで、段のことを意味し、「タカハシ」は自然堤防洲の微高地を表したと考えられている（『大口町史』）。

### ○通称名（集落）

本郷（ほんごう）

江戸時代の村絵図に、「居屋敷 大屋敷郷」と記述があり、大屋敷村の中核となる集落だった。明治時代以降は「本郷」が小字名となり、大屋敷地区の集落（組）のひとつとして、この地域を「本郷」と呼んでいる。

新田（しんでん）

江戸時代の村絵図に、「居屋敷 新田郷」と記述がある。大屋敷地区の集落（組）のひとつとして、この地域を「新田」と呼んでいる。

幼川（ようせん）

江戸時代、五条川を幼川おさながわと呼んでいたが、新田から高橋にかけて、五条川右岸沿いの集落を音読みで幼川（ようせん）と呼ぶ。

安藤屋敷（あんどうやしき）

大屋敷三丁目地内、旧字向野の集落に安藤姓が固まっていることから呼ばれるようになった。

### 【字名】

○大御堂一丁目

大御堂（おおみどう）

町名「大御堂」参照。一九八一（昭和五十六）・一九八六年の境界変更により一部を江南市へ編入した。

北海道（きたかいどう）

一八八四（明治十七）年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字竹田前」・「字覚王寺」にあたる。

海道は街道の意味で、村落の北の方の街道のある地のこと（『大口町史』）。

### 縣（あがた）

江戸時代の村絵図で確認できる。大縣神社おおあがたから勧請かんじょうして縣社を創建したので、江戸時代から小字名として使われている。

### 宮前（みやまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字八ツ面」にあたる。三明神社の前（南）の位置にあることからこの名称になったと考えられる。

## ○大御堂二丁目

### 吹野（ふきの）

江戸時代の村絵図で確認できる。フキが転じてフケは深田・低湿地の意味がある（『日本の地名』）。

### 八ツ面（やつめん）

江戸時代の村絵図で確認できる。ヤチには泥・湿地、メンには字（あざ）の意味があり（『日本の地名』）、ヤチメンが転じて八ツ面になったと考えられる。三明神社の所在地である。江戸時代、神社の東側は「字宮腰」、

その東に「字堀込」・「字住蓮寺」が存在したが、明治時代以降に「字八ツ面」に含まれた。

## ○丸一丁目

### 山王道（さんのうどう）

江戸時代の村絵図に「字山王堂」と記載されている。

### 白金（しろかね）

江戸時代の村絵図で確認できる。白ヶ根が転化したものと考えられ、砂地を意味するところが多い。「根」は地・土の意味がある（『大口町史』）。

### 植松（うえまつ）

江戸時代の村絵図で確認できる。

### 八ツ垂（はつたれ）

江戸時代の村絵図に「初足り」と確認できる。ハツタには湿地という意味がある（『日本の地名』）。

## ○丸二丁目

### 上野（うえの）

江戸時代の村絵図に「字植野」と記載されている。他の村絵図では「字上野」とある。

丸（まる）

《名称地番変更により、下小口七丁目へ》

江戸時代の村絵図で確認できる（町名「丸」参照）。

### ○大屋敷一丁目

花ノ木（はなのき）

江戸時代の村絵図で確認できる。榛（ハン）の木（カバノキ科の落葉樹）がハナノ木に転じたもので畑の意味と考えられる（『大口町史』）。

本郷（ほんごう）

一八八四年の地籍図で確認できる。大屋敷の中心となる集落。江戸時代の村絵図では「居屋敷」と記載されている。他の村絵図には、本郷にあたる範囲の周囲に「字十王堂」・「字寺腰」・「字西浦」・「字上流」・「字麻畑」・「五輪石」が確認できる。

坂小渕（さかこぼち）

一八八四年の地籍図で確認できる。坂は境の転化したもので本郷と高橋との境にあたる渕の意味と考えられる（『大口町史』）。江戸時代の村絵図には、坂小渕にあたる範囲の周囲に「字水道」・「字高畑」・「字五反田」・

「字神明道」といった字名が確認できる。

下流（しもながれ）

江戸時代の村絵図で確認できる。「字上流」は「字本郷」に取り込まれ、「字下流」が残った。一九八一年の境界変更により、一部を江南市へ編入した。

平生（へいぜい）

江戸時代の村絵図で確認できる。ひらたくなるの意の「ひらぶ」で、草木のはえる所を開懇し田畑にした所を表し、のちに「ヒラブ」を「ヘイゼイ」と呼んだ（『大口町史』）。

### ○大屋敷二丁目

勝負池（しょうぶいけ）

江戸時代の村絵図に「勝負池」と書かれた池が記載されている。他の村絵図には「字水引塚」・「字登渡」・「字山ノ神」といった字名が記載されている。地名としては一八八四年の地籍図で確認できる。

樋田（といだ）

江戸時代の村絵図で確認できる。樋の字からこの地が用水から水を引くことに関連していると考えられる。

## ○大屋敷三丁目

## 大塚（おおづか）

一八八四年の地籍図で確認できる。「大塚」という塚（古墳か）があったことに由来する。村絵図にも塚の表現が描かれている。

## 向野（むかいの）

江戸時代の村絵図で確認できる。本郷から見て川の向こう側という意味と考えられる。

## 寺東（てらひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。長松寺の東側の意味。江戸時代の村絵図では、「字向野」・「字清水」の範囲にあたる。

## ○高橋二丁目

## 高橋（たかはし）

町名「高橋」参照。

## 長測（ながぶち）

《名称地番変更により、大字豊田から高橋二丁目に》

第四編第三章第二節奈良子二丁目「長測」参照。

## ○高橋二丁目

## 上大塚（かみおおづか）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字五反林」の範囲にあたる。

## 樋先（といさき）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字五反林」の範囲にあたる。自然の落差では水田に水をかけることができないので、樋で水を通した田地の先端の地の意味（『大口町史』）。

## 山間（やまま）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、「字向野」の範囲にあたる。一面山林であったところを開墾したもので、山林の間にある集落を示した。昔は「ヤマアイ」と呼んだと考えられる（『大口町史』）。

## 第四節 外坪

(4-2-6 外坪地区名称地番変更図)

外坪三丁目の集落を、「巾」と呼んでいる(外坪三丁目

「巾上」・外坪四丁目「巾下」参照)。

### 【字名】

#### ○外坪一丁目

##### 六反田(ろくたんだ)

一八八四(明治十七)年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字永苻」の範囲にあたる。六反を一区画とする田地の意味(『地名の研究』)。

##### 郷屋敷(ごうやしき)

一八八四年の地籍図で確認できる(通称名「郷」参照)。

##### 郷東(ごうひがし)

江戸時代の村絵図で確認できる。境川の南側は「字宮下」とあるが、これは南側の河岸段丘上に神明社があることから「前田」と名付けられたと考えられる。

##### 前田(まえだ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷東」の範囲にあたる。郷屋敷の南側に田があることから「前田」と名付けられたと考えられる。

#### ○大字外坪(とつば)

江戸時代の村絵図に「外坪村」と確認できる。川の堤防の外にある土地から(『尾張國地名考』)。

#### ○町名

外坪 「大字外坪」参照。

#### ○通称名(集落)

##### 郷(ごう)

江戸時代の村絵図には「御新田屋敷」と記載され、「居屋敷」を表す色で表現されているため、集落があったことを示している。

##### 松山(まつやま)

集落のひとつとして字名の「松山」が、そのまま集落名として使われている。

##### 巾(はば)

##### 大島(おおしま)

《名称地番変更により、新宮二丁目へ》

第四編第三章第八節新宮二丁目「大島」参照。

### ○外坪二丁目

#### 豆田（まめだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図には「字井堀東」の範囲にあたる。低地と微高地が入り組んだ地で、その隙間ある田、すなわち間間田（まだ）が転じて豆田になったもの（『大口町史』）。

#### 大長（おおおさ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図には「字井堀東」の範囲にあたる。田の区画をオサといい、耕地整理のことをオサナオシといったところから、大きく区画整理された意味を示す（『大口町史』）。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

### ○外坪三丁目

#### 宮前（みやまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。区域内の北端に神明社があるため名付けられたと考えられる。江戸時代

の村絵図では「字巾上」の範囲にあたる。

#### 巾上（はばうえ）

江戸時代の村絵図で確認できる。巾には崖の意味があり、河岸段丘の上にあることから「巾上」と呼ぶ（『愛知の地名』）。

### ○外坪四丁目

#### 巾下（はばした）

江戸時代の村絵図で確認できる。巾には崖の意味があり、河岸段丘の下にあることから「巾下」と呼ぶ（『愛知の地名』）。

#### 松山東（まつやまひがし）

江戸時代の村絵図で確認できる。村絵図は巾下川がやや西に蛇行し、南の村境近くの左岸に「字中野」、右岸には巾下川と水路の間に田があり「字東ハサマ」と記載されている。

### ○外坪五丁目

#### 柿田（かきた）

江戸時代の村絵図では、境川の南に、東から西に「字

ドイノウチ」・「字高畑裏」・「大セマチ」とある範囲にあたる。一八八四年の地籍図では、東から「字前畑」・「字柿田」・「字大勢町」とある。

#### 柿田前（かきたまえ）

江戸時代の村絵図では、東から西に「字南野」・「字石塚」とある範囲にあたる。一八八四年の地籍図では、東から「字南野」・「字高畑前」とある。

#### 松山（まつやま）

江戸時代の村絵図では、東から西に「字大門東」・「松山居屋敷」・「字松山西」の範囲にあたる。一八八四年の地籍図では、「字松山」となる。一面の松山だったことが由来とされる（『五十年の歩み』）。

#### 松山西（まつやまにし）

江戸時代の村絵図で確認できる。江戸時代は「字西ハサマ」、その西は「河内屋新田」の入合地であった。「字西ハサマ」は、水路と境川の間に位置した。一八八四年の地籍図では、「字西廻間」とある。一九七八年の境界変更により一部を小牧市へ編入した。

## 第五節 河北

（4-2-7 河北地区名称地番変更図）

#### ○大字河北（こぎた）

川の北にある集落なので川北（かわきた）と称し、俗に縮めてコギタと呼んだ（『尾張國地名考』）。『寛文村々覚書』では「川北村」とあり、『尾張<sup>じゆんこうき</sup>徇行記』では「河北村」と表記されている。

#### ○町名

河北 「大字河北」参照。

仲沖（なかおき）

『寛文村々覚書』に「枝郷 中沖 二ツ屋」とある。

二ツ屋（ふたつや）

二軒屋の意味で、開村当時、二軒の人が開発にあたったことから、そのまま地名として後世に残ったと伝えられる（『大口町史』）。

## ○通称名（集落）

## 上郷（かみごう）

地区内で五条川の北の集落を上郷と呼ぶ。

## 【字名】

## ○河北字神明下

## 神明下（しんめいした）

一八八四（明治十七）年の地籍図で確認できる。北東に近接して神明社（犬山市内）があることによる。江戸時代の村絵図には「字神明池」とある範囲にあたる。二〇二三（令和五）年現在で唯一残っている字名。

## ○河北一丁目

## 棧敷（さんじき）

江戸時代の村絵図では「字三敷」の範囲にあたる。明治時代以降は同じ読みで「字棧敷」となった。河北地内の北端に位置し、村内において郷瀬川の最上流部に沿った地であり、堤防があり高く構えた地の意味と考えられる（『五十年の歩み』）。一九七三（昭和四十八）年の境界変更により一部が扶桑町へ編入し、一九七八

年の境界変更では一部を犬山市から編入した。

## 北川田（きたかわた）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字三敷」・「字鴨池」あたりの範囲に該当すると考えられる。『尾張御行記』に「田面郷瀬川の決壊ありて水災を受けることあり」との記載から、「川田」と名付けられた由来と考えられる。村絵図の「字鴨池」は田になっているが、犬山城主成瀬氏の狩場を「お鴨池」といったともある（『大口村誌』）。

## 南川田（みなみかわた）

「北川田」参照。

## 西見浦（にしみうら）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、郷瀬川の右岸に「字三浦」とある範囲にあたる。一九七三年の境界変更により、一部が扶桑町へ編入した。

## 柳原（やなぎはら）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字石曾根」とある範囲にあたる。

## 芋堀（いもほり）



一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字石曾根」の範囲にあたる。地内に用水堀があるため、井堀が転訛したと考えられる（『大口町史』）。

#### 羽加ノ上（はかのうえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字石曾根」の範囲にあたる。

#### 石曾根（いしぞね）

江戸時代の村絵図で確認でき、他の字よりも広範囲にわたる。ソネは局地的に砂地・石地をなす痩せ地の所（『日本の地名』）。

#### 蟹ヶ坪（かにがつぼ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字石曾根」の範囲にあたる。カニは曲がったところを意味し、おそらく水路の極端に曲がった区画という意味と考えられる（『大口町史』）。

#### 東端（ひがしばた）

江戸時代の村絵図で確認できる。上郷集落の東端にあたるため名付けられたと考えられる。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

#### 下大日（しもたいにち）

犬山市大字羽黒字下大日であったが、一九七八年の境界変更により一部を犬山市から編入した。

#### 塚本（つかもと）・大竹（おおたけ）・中窪（なかくぼ）

一九七三年の境界変更により、一部を扶桑町から編入した。

#### ○河北二丁目

#### 北割（きたわり）

一八八四年の地籍図で確認できる。土地を開発して分配する際の分け振りの仕方を表す（『大口町史』）。江戸時代の村絵図では「字石曾根」の範囲にあたる。

#### 伴上（ばんじょう）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代に交通の要所に設けて、通行人を見張った番所の転訛と考えられる（『大口町史』）。江戸時代の村絵図では「字石曾根」の範囲にあたる。

#### 平田（ひらた）

一八八四年の地籍図で確認できる。ヒラは平地を意味する（『日本の地名』）ことから、比較的平らな田の意味と考えられる。江戸時代の村絵図では「字石曾根」

の範囲にあたる。

#### 井両 (いりょう)

一八八四年の地籍図で確認でき、「字井両」地内に水路が多く確認できる。「井」は水路を表し、「両」は「領」の当て字とすると「水路の多い土地」の意味になる(『日本の地名』)。江戸時代の村絵図では「字石曾根」の範囲にあたる。

#### 東割 (ひがしわり)

一八八四年の地籍図で確認できる。土地を開発して分配する際の分け振りの仕方を表す(『大口町史』)。村絵図には「居屋敷」・「田」とあるのみで字名の記載はないが、「字郷前」の範囲にあたる。

#### 釈迎の下 (しゃかのした)

一八八四年の地籍図で確認できる。坂の下が訛なまったもの(『大口町史』)。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。一九七八年の境界変更により一部を犬山市から編入した。

#### 郷前 (ごうまえ)

江戸時代の村絵図で確認でき、五条川兩岸の広範囲にわたる。「郷」は集落を、「前」は南側を表す。

#### 郷中 (ごうなか)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図には「居屋敷」・「野」・「宮」を含んだ「字郷前」の範囲にあたる。「郷」は集落を表す。

#### 西割 (にしわり)

一八八四年の地籍図で確認できる。土地を開発して分配する際の分け振りの仕方を表す(『大口町史』)。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。

#### 五三次 (ごさんじ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。

### ○河北三丁目

#### 五反田 (ごたんだ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。五反を一区画とする田地の意味(『地名の研究』)。

#### 長箴 (ながおさ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。オサは田の一区画を

表す（『日本の地名』）。

### 馬喰島（ばくろじま）

江戸時代の村絵図で確認できる。中世から近世にかけて、牛馬の売買、その仲介する者を馬喰（ばくろう）といった。

### 藤ノ木（ふじのき）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。

### 町田（まちだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。「町」は土地の区画を表す意味がある（『地名の研究』）。

### 両目（りょうめ）

一八八四年の地籍図で確認でき、「字両目」の中央に東西に流れる水路がある。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。分目（分けた所、区別した地点）の目と同じで、二つに分けた田地を意味し、河北と沖の境目ということ（『大口町史』）。

### 一本宮（いっぽんのみや）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図

では「字郷前」の範囲にあたる。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

### 柿野（かきの）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字中沖浦」の範囲にあたる。仲沖集落の浦（裏）、集落の北側の意味。

### ○仲沖一丁目

### 三神（さんじん）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字中沖前」の範囲にあたり、その内に「山神」と記されている。また、北に近接して「天王」とあるが、これは現在の津島社のこと、境内に三神と書かれた石碑があり、ほ場整備の際「字三神」から移したものである。

### 天王前（てんのうまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字中沖前」の範囲にあたり、北に近接して「天王」とある。「天王」は現在の津島社の祭神牛頭天王のこと、その社の前を「字天王前」とした。

## 仲沖（なかおき）

江戸時代の村絵図に「居屋敷 枝郷 中沖」とある。『尾張國地名考』には、「いにしえは岐蘇の長流伊木山前渡山に突き当たりて、それより水勢逆浪乱れ散りて蜘蛛のごとくに分かる。（中略）また木津・羽根鳴海・高橋・河北・中沖・二ツ屋・外坪・長狭倉・三淵の方へと流れる。此条のうち河北・中沖の辺りにては濁り水も淀み其うへ入鹿山のしずくの清水も落ちあい湛えてたひらかなる沖をなす所なりけり」と記述がある。

## ○仲沖二丁目

## 樁下（つばきした）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字中沖前」とある。東に隣接する犬山市の樁集落が河岸段丘の上にあることから、「樁下」になったと考えられる。

## 仲沖東（なかおきひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では北半分が「字中沖前」、南半分が「字二ツ屋浦」とある。「字二ツ屋浦」は、二ツ屋集落の浦（裏）、集落

の北側の意味。仲沖集落の南東の区画として「字仲沖東」になったと考えられる。

## 仲沖前（なかおきまえ）

江戸時代の村絵図で「字中沖前」とその南に「字二ツ屋浦」と確認できる。「字中沖前」は、仲沖集落の南から南東にかけて広がる範囲であった。明治時代以降に入り細長い区画で「字仲沖前」となった。

## 北ノ坪（きたのつぼ）

《名称地番変更により、上小口（萩島）から仲沖二丁目》  
江戸時代の村絵図で確認できる。ツボには、集落の一部という意味がある（『日本の地名』）。

## ○二ツ屋一丁目

## 宮東（みやひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字二ツ屋前」の範囲にあたり、二ツ屋集落の東から南にかけて広がっている。明治時代以降は、神明社の東の土地を「字宮東」とした。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

## 二ツ屋（ふたつや）

江戸時代の村絵図に「居屋敷 枝郷 二ツ屋」とある。  
二軒屋の意味（町名「二ツ屋」参照）。

### 西狭間（にしはざま）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字二ツ屋前」の範囲に含まれる可能性がある。神明社から南西に向かって集落が展開しており、その西にあたる範囲を明治時代以降に「西狭間」にしたと考えられる。

### 巾上（はばうえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字二ツ屋前」の範囲にあたる。巾には崖の意味があり、河岸段丘の上にあることから「巾上」と呼ぶ（『愛知の地名』）。この河岸段丘は外坪まで続き、外坪にも同じ地名がある。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

### 伊賀田（いがた）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字二ツ屋前」の範囲にあたる。イガ（イカ）は、背後に高い土地があることを表す（『日本の地名』）。河岸段丘の下にある田で「伊賀田」にしたと考えられる。

### 〇二ツ屋二丁目

#### 百畝町（ひやくせまち）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字二ツ屋前」の範囲にあたる。マチは一区画の田の意味で、百畝で一区画の田とした土地の意味か（『日本の地名』）。百畝は一〇反であり一町である。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

#### 寺島（てらしま）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、北側が二ツ屋集落で南が「字二ツ屋前」の範囲にあたる。シマは、田・川沿いの耕地・集落の意味がある（『日本の地名』）。

#### 磯ヶ下（いそがした）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字二ツ屋前」の範囲にあたる。イソには岩という意味があり（『日本の地名』）、磯ヶ下は河岸段丘の下の意味と考えられる。一九七八年の境界変更により一部を犬山市へ編入した。

#### 天神塚（てんじんづか）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図

では「字ニツ屋前」の範囲にあたる。昔、塚の上に天神社が祀<sup>まつ</sup>られていたが、道路改修の用途で土取りをしたので塚は残っていない（『大口村誌』）。

#### 青塚東（あおつかひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字ニツ屋前」の範囲にあたり、犬山市の青塚集落の北東に位置する。

#### 塚田

第四編第三章第七節萩島一丁目「塚田」参照。

#### 東出（ひがしで）

《名称地番変更により、上小口（萩島）からニツ屋二丁目に》  
江戸時代の村絵図で確認でき、「字ニツ屋前」の範囲にあたる。

#### 出口（でぐち）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字ニツ屋前」の範囲にあたる。

## 第六節 余野

（4-2-8 余野地区（余野・垣田・さつきヶ丘）名称地番変更図）

### ○大字余野

あまる野という意味か。その意味を知らず「ヨノ」と呼んだか（『尾張國地名考』）。

### ○町名

余野 「大字余野」参照。

### 垣田（かきた）

一八八四（明治十七）年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字笠田」「字久手」の範囲にあたる。クテは湿地帯を表す。

### さつきヶ丘

一九八七（昭和六十二）年、余野区から分区してできた地名。

○通称名

川西・川東（かわにし・かわひがし）

かつて、昭和用水を境に「川西」・「川東」と分けて呼んでいた。

【字名】

○余野二丁目

西浦（にしうら）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字表畑」（主に余野二丁目地内）・「字だれ」（主に余野二丁目地内）の範囲にあたる。一九七八年の境界変更により一部を扶桑町へ編入した。

清水（しみず）

江戸時代の村絵図で確認できる。扇状地の伏流水で、かつては清水がわいていた。

日高（ひだか）

余野六丁目「日高」参照。

○余野二丁目

西浦（にしうら）

余野一丁目「西浦」参照。

僧都庵（そうづあん）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字表畑（表野畑）」・「字中嶋」の範囲にあたる。

寺前（てらまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。徳林寺を含む南側を寺前としたと考えられる。江戸時代の村絵図では「居屋敷」が広く字名が記されていない。

○余野三丁目

少々腰（しょうじょういし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字上畑田」の範囲にあたる。

明戸（みょうど）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字鷹たかの山」の範囲にあたる。

宮西（みやにし）

一八八四年の地籍図で確認できる。東側の大字余野境にあたる中小口側に、一九一四（大正三）年まで社があったことから「宮西」となったと考えられる。江戸

時代の村絵図では「字天神東」とあり東側に「天神宮」が描かれている。

### 宮前（みやまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。「宮西」と同じく、一部が中小口側にあるため「宮前」となったと考えられる。江戸時代の村絵図では「字天神東」の範囲と考えられる。

### 天神前（てんじんまえ）

江戸時代の村絵図で確認でき、「天神宮」の南に位置するため「天神前」となった。

## ○余野四丁目

### 寺前（てらまえ）

余野二丁目「寺前」参照。

### 権現浦（ごんげんうら）

江戸時代の村絵図に「字権現裏」とある（余野五丁目「権現」参照）。

### 川向（かわむかい）

一八八四年の地籍図で確認できる。神明社（現余野神社）からみて、昭和用水を挟んだ向かいに位置するた

めか。江戸時代の村絵図では「居屋敷」となっている。神明下（しんめいした）

一八八四年の地籍図で確認できる。北側に神明社（現余野神社）があることから「神明下」となった。江戸時代の村絵図では「字下流」の範囲にあたる。

## ○余野五丁目

### 権現（ごんげん）

一八八四年の地籍図で確認できる。明治維新前には、高さ五間（約九m）ほどの丘に権現が祀まつられていたことが由来（『大口村誌』）。江戸時代の村絵図では「字若ケ橋」の範囲にあたる。

### 権現西（ごんげんにし）

一八八四年の地籍図で確認できる。権現の西側。江戸時代の村絵図では「字若ケ橋」の範囲にあたる。

### 若ケ橋（わかんばし）

江戸時代の村絵図で確認できる。もとは「わかばし」といい、小池与九郎が社を建て風景を添えようと松・桜・カエデなどを植え、近郷の雅人も来てともに和歌を詠じたので「和歌ケ橋」ともいう。付近の銀しろがね塚（一



説にはここにあすまやある亭に至る橋)で和歌を詠じたとの伝承がある(『大口村誌』)。

### 大福寺(だいふくじ)

江戸時代の村絵図で確認できる。『大口村誌』に、「大福寺があつたので地名として残った」とあるが、「このあたりを掘ると金くそが出る。刀鍛冶屋かじがいたと想像される」との記述もあり、「フクダは炭火を吹く(フク)に因ちなんで鍛冶をいう」(『日本の地名』)ことをあわせると、寺との関連より江戸時代以前に野鍛冶をした場所(寺が地)という意味も考えられる。

### ○余野六丁目

#### 大福寺(だいふくじ)

余野五丁目「大福寺」参照。

#### 田代(たしろ)

江戸時代の村絵図で確認できる。タシロは、田をこしらえた所、つまり新田のこと(『日本の地名』)。

#### 田代西(たしろにし)

一八八四年の地籍図で確認できる。田代の西。江戸時代の村絵図では「字田代」の範囲にあたる。

#### 中畑(なかはた)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字郷前」の範囲にあたる。

#### 下流(しもながれ)

江戸時代の村絵図で確認できる。昭和用水に因む。

#### 日高(ひだか)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字石橋」・「字だれ」の範囲にあたる。ヒダには、辺鄙(へんぴ)の意味がある(『日本の地名』)。一九七八年の境界変更により一部を扶桑町へ編入した。

#### 清水(しみず)

余野一丁目「清水」参照。一九七八年の境界変更により一部を扶桑町へ編入した。

### ○垣田(かきた)

町名「垣田」参照。

#### 花立(はなたて)

一九七三年の境界変更により、一部を扶桑町から編入した。

○さつきヶ丘一丁目

水瀬（みずせ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字溝寄・字溝よせ」の範囲にあたる。一九七三年の境界変更により一部を扶桑町へ編入した。

○さつきヶ丘二丁目

浅畑（あさばた）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字溝寄・字溝よせ」の範囲にあたる。

寺浦（てらうら）

江戸時代の村絵図で確認でき、徳林寺北側に「字寺浦」とある。「浦」は「裏」の意味。その西側には「字溝寄」、徳林寺西側には「字中嶋」と描かれている。

御字神（おじがみ）

一九七八年の境界変更により一部を扶桑町から編入した。

## 第七節 上小口

（4-2-9 上小口地区名称地番変更図）

○大字小口（おぐち）

台地の川の出口。また分流口の意味で、木曾川の枝川が流れていた所（『愛知の地名』）。中世には、尾口とも書いた。尾は山のさきの垂れたる（傾斜）をいう（『尾張國地名考』）。承平年間（九三一〜九三八）に成立した『倭名類聚抄』には、尾張国丹羽郡内の郷名に「小口」とある。

○通称名

上小口・中小口・下小口

（かみおぐち・なかおぐち・しもおぐち）

『寛文村々覚書』の小口村の項で、「枝郷 上小口 中小口 下小口 萩嶋」とある。『尾張徇行記』では、小口村は上小口・中小口・下小口の三村に分かれるとある。五条川の上流から上小口・中小口・下小口にしたと考えられる。

## ○町名

上小口 通称名「上小口・中小口・下小口」参照。

萩島 (はぎしま)

『尾張徇行記』に「萩島は上小口に属する」と記載がある。萩は、「土地がはがれやすい所」の意味があり(『愛知の地名』)、シマは「川沿いの耕地」を表す(『日本の地名』)。木津用水と新木津用水に挟まれ、洪水時に耕作土が流されることが多かったと考えられる。

## 【字名】

### ○上小口一丁目

油田 (あぶらでん)

一八八四年(明治十七)年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字起」の範囲にあたる。

獅子毛 (しじげ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字起」の範囲にあたる。シケは湿地を示したものの(『日本の地名』)。

弁天東 (べんてんひがし)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図

では「字原田」の範囲にあたる。

起シ(おこし)

江戸時代の村絵図で「字起」と確認できる。オコス(起す・興す・耕す)にはいろいろな意味があり、ここでは開墾地を表したものの(『大口町史』)。

北ノ山 (きたのやま)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字起」の範囲にあたる。

水戸 (すいと)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「居屋敷」となっている。水戸とは水のある場所のこと(『日本の地名』)。

郷浦 (ごううら)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「上組郷浦・上郷浦」の範囲にあたる。上小口の郷(集落)の浦(裏)の意味。

郷西 (ごうにし)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「上組郷浦・上郷浦」の範囲にあたる。上小口の郷(集落)の西の意味。

西屋敷(にしやしき)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字山伏」の範囲にあたる。

郷中(ごうなか)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字山伏」の範囲にあたる。

墓ノ腰(はかのこし)

一八八四年の地籍図で確認できる。コシは側の意味。江戸時代の村絵図では「字山伏」の範囲にあたり、墓地が近接している。

上山伏(かみやまぶし)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字山伏」の範囲にあたる。

丸ノ内(まるのうち)

《名称地番変更により中小口から上小口二丁目》  
一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字定光寺」の範囲にあたる。マルは砦とりでの意味があり、「丸ノ内」は砦の領域内の意味を持つ(『愛知の地名』)。小口城の領域内として「丸ノ内」にしたか。

○上小口二丁目

亀ヶ淵・中窪(かめがぶち・なかくぼ)

一九七三年の境界変更により、一部を扶桑町から編入した。

郷瀬(ごうせ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字太郎丸」の範囲にあたる。

北太郎丸(きたたろうまる)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字太郎丸」の範囲にあたる。

上向江(かみむかえ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字太郎丸」の範囲にあたる。

石曾根(いしぞね)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字長淵」の範囲にあたる。河北村の村絵図では、「石曾根」の範囲が東西に長く広がっており、そこに接している(第四編第三章第五節河北一丁目「石曾根」参照)。

上長淵・中長淵(かみながぶち・なかながぶち)

江戸時代の村絵図で確認でき、「字長淵」の範囲にあたる。明治時代以降は「上長淵」と「中長淵」に分けて記載されている。フチは縁に通じ(『日本の地名』、木津用水と五条川に接する川縁(川のほとり)の土地として「字長淵」と名付けられたと考えられる。

### ○上小口三丁目

#### 原田(はらだ)

江戸時代の村絵図で確認できる。

#### 馬喰島(ばくろじま)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字万願寺」の範囲にあたる。

#### 上万願寺・西万願寺(かみまんがんじ・にしまんがんじ)

江戸時代の村絵図では「字万願寺」の範囲にあたる。一八八四年の地籍図では、「上万願寺」・「西万願寺」・「東万願寺」・「下万願寺」(現中小口二丁目地内)に分けて記載されている。『大口村誌』の万願寺塚の項によれば、上小口字田中の田中屋敷跡の東にある万願寺塚から「南無妙法蓮華経」の題目が書かれた丸い石が出るため、この地が万願寺の跡だという伝承がある。ま

た、村絵図には字田中のあたりに「観音堂」と書かれているが、このほかに寺院が存在した資料は確認できていない(第四編第三章第八節中小口二丁目「東万願寺・下万願寺」参照)。

#### 田中(たなか)

江戸時代の村絵図で確認できる。『大口村誌』によれば、小口城主織田遠江守広近の家老、田中惣右衛門の屋敷があり、周囲の土塁が残っていたとある。

#### 金三西(きんざにし)

《名称地番変更により、中小口二丁目へ》

第四編第三章第八節中小口二丁目「金三西」参照。

### ○萩島一丁目

#### 東柿野・西柿野(ひがしかきの・にしかきの)

江戸時代の村絵図では「字柿野」の範囲にあたる。明治時代以降の記録には「東柿野」・「西柿野」に分かれている。「柿」は欠ける所に通じる(『愛知の地名』)。

#### 下田(しもだ)

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、用水沿いの「字浦梨田(うりた)」と、その東の

「字北ノ坪」が範囲にあたる。ウリは川の曲がった所にみられる（『日本の地名』）。一八八四年の地籍図では細い水路が二筋に分かれ、曲がりつつ通っている。

#### 井堀間（いぼりま）

一八八四年の地籍図で確認できる。二つの水路（井堀）の間にある土地の意味。江戸時代の村絵図では「字荒井」と「字井堀合」の範囲にあたる。

#### 高岡（たかおか）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字東出」の範囲にあたる。

#### 島浦（しまうら）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字萩島浦」の範囲にあたる。萩島集落の裏の意味。

#### 塚田（つかだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字山前田」・「字二ツ屋前」の範囲にあたる。

#### ○萩島二丁目

#### 島内（しまうち）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字萩島」の範囲にあたる。

#### 島前（しままえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字萩島前」・「字大坪」の範囲にあたる。

#### 梨子ノ木（なしのき）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字萩島前」の範囲にあたる。

#### 上大坪（かみおおつば）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字大坪」の範囲にあたる。ツボは、広さ・面積の単位のほか、庭・淵・穴・くぼみ・町村の一部を示す（『日本の地名』）。

#### 北ノ坪

《名称地番変更により、仲沖二丁目へ》

江戸時代の村絵図で確認できる地名（第四編第三章第五節仲沖二丁目「北ノ坪」参照）。

#### 東出

《名称地番変更により、二ツ屋二丁目へ》

江戸時代の村絵図で確認できる地名（第四編第三章第

五節二ツ屋二丁目「東出」参照。

## 出口

《名称地番変更により、二ツ屋二丁目へ》

第四編第三章第五節二ツ屋二丁目「出口」参照。

## 清水

《名称地番変更により、新宮二丁目へ》

第四編第三章第八節新宮一丁目「清水」参照。

## 下林（しもばやし）

一九七七（昭和五十二）年から翌年にかけておこなわれた境界変更により、扶桑町へ編入。

## 第八節 中小口

（4―2―10 中小口地区名称地番変更図）

### 【字名】

#### ○中小口一丁目

##### 西山神（にしやまのかみ）

一八八四（明治十七）年の地籍図で確認できる。江戸時代の絵図では「字定光寺」の範囲にあたる。

##### 定光寺（じょうこうじ）

江戸時代の村絵図に「字定光寺」と確認できる。

##### 西野合（にしのおい）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字定光寺」の範囲にあたる。

##### 地藏堂（じぞうどう）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字北出」の範囲にあたる。

##### 下ノ段（しものだん）

江戸時代の村絵図では「居屋敷」の範囲にあたり、字名は書かれていない。

## 宮之前（みやのまえ）

江戸時代の村絵図には、「居屋敷」の範囲内にあたり、「神明境内 妙徳寺境内」とも書かれている。字名は書かれていないが、余野境に神明社があり、一八一六（大正五）年、小口神社に合祀ごうしされている。

## 丸ノ内

《名称地番変更により、上小口二丁目へ》

第四編第三章第七節上小口一丁目「丸ノ内」参照。

## ○中小口二丁目

## 金三西（きんざにし）

《名称地番変更により、上小口から中小口二丁目に》

江戸時代の村絵図では「字山伏」の範囲にあたる。『大口村誌』によると、一九三一（昭和六）年頃、上小口字金三西にある小口劇場の東から小判が二枚、翌年に一枚出たとの伝承がある。

## 下山伏（しもやまぶし）

江戸時代の村絵図では「字山伏」の範囲にあたる。明治時代以降、「上山伏（上小口一丁目地内）」・「金三西」・「下山伏」に分かれた。

## 馬場（ばんば）

江戸時代の村絵図には字名が書かれておらず、「御城山」とある。小口城の北側に近接し、馬の調教をしていたため「馬場」になったとの伝承がある。

## 東方願寺・下万願寺（ひがしまんがんじ・しもまんがんじ）

江戸時代の村絵図では「字万願寺」の範囲にあたる。明治時代以降、この「字万願寺」から「上万願寺・西万願寺（上小口三丁目）」・「東方願寺」・「下万願寺」の四つに分かれた（第四編第三章第七節上小口三丁目「上万願寺・西万願寺」参照）。

## ○中小口三丁目

## 上野合・下野合（かみのあい・しものあい）

江戸時代の村絵図には「字野合」とある。『大口村誌』では「上野合」・「西野合」と表記されている。

## 中川原（なかかわはら）

一九三八年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字野合」の範囲にあたる。

## 鍋田（なべた）

一九三八年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図



では「字榎坪」の範囲にあたる。

### 上木賀田・下木賀田（かみがた・しもきがた）

江戸時代の村絵図では「字木賀田」の範囲にあたる。明治時代以降は「上木賀田」と「下木賀田」に分かれる。キガが転じてコガと呼び、未墾地・空闲地を意味するほか、村内の小区画の意味を持つ（『日本の地名』）。

### 樋田（といだ）

江戸時代の村絵図で確認できる。樋の字からこの地が用水から水を引くことに関連していると考えられる。

### 辻田（つじた）

江戸時代の村絵図で確認できる。辻は交差点・道筋の意味があるため「辻田」となったと考えられる。

### 烏田（からすだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字大鹿」の範囲にあたる。カラスには、小石の土地の意味があり（『日本の地名』）、小石混じりの田の意味と考えられる。

### 東大鹿（ひがしおおしか）

江戸時代の村絵図では「字大鹿」の範囲にあたる。シカには、砂州の意味があり（『日本の地名』）、砂混じり

の土質の意味と考えられる。

### ○中小口四丁目

#### 下長測（しもながぶち）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字長測」の範囲にあたる。五条川が木津用水に流れ込む直前の左岸に位置する。江戸時代の村絵図で確認できる「字長測」は、五条川の右岸となる。

#### 北穴田・南穴田（きたあなだ・みなみあなだ）

江戸時代の村絵図では「字穴田」の範囲にあたる。明治時代以降は、「北穴田」と「南穴田」に分かれる。

#### 一本松（いっぽんまつ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字穴田」の範囲にあたる。

#### 仲沖

第四編第三章第五節仲沖一丁目「仲沖」参照。

### ○中小口五丁目

#### 長蔵橋（ちようぞうばし）

一八八四年の地籍図で確認できる。木津用水に架かる

橋の名を小字名としたと考えられる。江戸時代の村絵図では「字稲口浦」の範囲にあたる。

### 寺田巽（てらだたつみ）

《名称地番変更により、下小口から中小口五丁目に》

一八八四年の地籍図で確認できる。寺田集落から巽（東南）の方角の意味。江戸時代の村絵図では「字稲口浦」の範囲にあたる。

### 東神薙（ひがしかんなぎ）

一八八四年の地籍図で確認できる。カンナギは神社に關係し、東側の木津用水右岸に八幡社があったためと考えられる（第三編第三章第一節参照）。江戸時代の村絵図では「字稲口」・「字稲口浦」の範囲にあたる。『尾張洵行記』<sup>じゆんこうき</sup>には、下小口内の集落の一つとして「稲口」と記載されている。

### 西神薙（にしかななぎ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字稲口浦」の範囲にあたる（「東神薙」参照）。

## ○新宮二丁目

### 清水（しみず）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。最も北に八幡社があった（「東神薙」参照）。

### 稲口前（いなぐちまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。

### 下神薙（しもかななぎ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。

### 大坪（おおつぼ）

江戸時代の村絵図には、木津用水左岸に「大坪」とある（第四編第三章第七節萩島二丁目「上大坪」参照）。  
乾田（いぬいだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。

## ○新宮二丁目

### 外坪浦（とつぼうら）

江戸時代の村絵図で確認できる。

### 苗田島（なえだじま）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。

#### 新宮前（しんみやまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。

#### 新宮浦（しんみやうら）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字外坪浦」の範囲にあたる。

#### 大島（おおしま）

江戸時代の村絵図で確認できる。シマには、上大坪と同じように広い区域の田地という意味がある。

### ○城屋敷一丁目

#### 城屋敷（しろやしき）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図に「御城山」とあるが字名は確認できない。

#### 宮之前（みやのまえ）

第四編第三章第八節中小口一丁目「宮之前」参照。

#### 山中（やまなか）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図

に字名は確認できない。

### ○城屋敷二丁目

#### 向江（むかえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字大鹿」の範囲にあたる。

#### 西大鹿（にしおおしか）

江戸時代の村絵図に「字大鹿」とある。シカには、砂州の意味があり（『日本の地名』）、砂混じりの土質の意味と考えられる（第四編第三章第八節中小口三丁目「東大鹿」参照）。

#### 榎坪（えのきつぼ）

江戸時代の村絵図に確認できるが、位置が異なる。名称地番変更前の「字榎坪」は、村絵図では「字大鹿」の一部である。村絵図の「字榎坪」は名称地番変更前の「字鍋田」の範囲にあたる。水田灌漑用の細い用水路を「えぎ」と呼んだことから、「えぎ」がある田区の意味が榎の坪になったと考えられる（『大口町史』）。

## 第九節 下小口

(4-2-11 下小口地区名称地番変更図)

## ○通称名

## 三軒家(さんげんや)

下小口七丁目地内「字新田」を三軒家と呼ぶ。由来は三軒の旧家から集落になった、もしくは岩の唐櫃からびつに宝剣宝玉が入っていたのを発見し、埋め戻して三体の不動尊を祀まつったという伝承から、「三劔矢」の字をあてたともある(『大口村誌』)。

## 【字名】

## ○下小口二丁目

## 仁所野(にじょの)

江戸時代の村絵図では「居屋敷」とあり、字名は確認できない。この「居屋敷」は、下小口二丁目から二丁目と三丁目の西半分に至る大きな集落であった。一八八四(明治十七)年の地籍図に「字仁所野」・「字宮前」・「字本郷」とある。仁所野の由来は、琴平神社と

白山社があることから、二か所の霊地という意味と考えられる(『大口町史』)。

## 宮前(みやまえ)

江戸時代の村絵図では「居屋敷」とあり、字名は確認できない。一八八四年の地籍図に「字宮前」とある。白山社の南側に位置するので「宮前」となった(「仁所野」参照)。

## 本郷(ほんごう)

江戸時代の村絵図では「居屋敷」とあり、字名は確認できない。一八八四年の地籍図に「字本郷」とある。ホンゴウは本村(元となる集落)、下小口の元という意味(『日本の地名』)。

## ○下小口二丁目

## 北屋敷(きたやしき)

江戸時代の村絵図では「居屋敷」とあり、字名は確認できない。一八八四年の地籍図に「字北屋敷」とある。

## 前田(まえだ)

江戸時代の村絵図では「居屋敷」とあり、字名は確認できない。一八八四年の地籍図に「字前田」とある。

### 上五明（かみごみよう）

下小口三丁目「中五明・下五明・東五明」参照。

### ○下小口三丁目

中五明・下五明・東五明（なかごみよう・しもごみよう・ひがごみよう）

江戸時代の村絵図に「字五明」とある。一八八四年の地籍図では、上五明も含め頭に上・中・下・東をつけ、四つの小字に分割されたことがわかる。ゴミヨウが転ジゴミの意味として泥地を表す（『日本の地名』）。

### ○下小口四丁目

天神前（てんじんまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字植野」の範囲にあたる。一九〇九年に白山社に合祀されるまで、下小口三丁目（字下五明）地内には天神社があり、その南側にあたるため名付けられたと考えられる。

### 山ノ神（やまのかみ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図

では「字植野」の範囲にあたる。一九二八（昭和三）年に白山社に合祀されるまで、塚に山の神を祀っていたことによる（『大口村誌』）。地籍図には、塚の横に「山神道」が確認できる。

### 植野（うえの）

江戸時代の村絵図では、「字植野」と「字下植野」に分かれていたことが確認できる。名称地番変更前の植野は、村絵図の「字下植野」に該当する。

### 上池田・下池田（かみいけだ・しもいけだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では上池田が「字植野」と「字下植野」、下池田が「字下植野」の範囲にあたる。

### ○下小口五丁目

寺田（てらだ）

江戸時代の村絵図で確認できる。『尾張徇行記』に下小口地区内の集落の一つとして「寺田」と書かれている。寺田東（てらだひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字寺田前」「字小虱」の範囲にあたる。

**寺田前（てらだまえ）**

江戸時代の村絵図で確認できる。寺田の南に位置するので、寺田前となったと考えられる。

**石田（いしだ）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字寺田前」・「字小虱」の範囲にあたる。

**上流（かみながれ）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字寺田」の範囲にあたる。五条川左岸沿いに「上流」・「中流」・「下流」とある。

**中流（なかながれ）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字寺田前」の範囲にあたる。

**下流（しもながれ）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字広瀬」の範囲にあたる。

**小虱（こじらみ）**

江戸時代の村絵図で確認できる。「シラミ」は白いに状態・程度を表す接尾語「み」がつき、虱の字をあてたもので、砂地を意味する地名（『大口町史』）。

**上猿境・下猿境（かみさるさかい・しもさるさかい）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字小虱」の範囲にあたる。砂利（ジャリ・ザリ）の砂礫地は地下への水の滲透がよく、筴（竹製のかご）は水が洩れることから、「ザル」は砂礫地を表し、ザルの清音サルに猿の字をあてたものと考えられる。砂地でも外坪と小口の境を示す地名であろう（『大口町史』）。

**○下小口六丁目****東曲田・西曲田（ひがしまがりだ・にしまがりだ）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字庭森」の範囲にあたる。

**上五反田・中五反田・下五反田（かみごたんだ・なかごたんだ・しもごたんだ）**

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字庭森」の範囲にあたる。五反を一区画とする田地の意味（『地名の研究』）。

**上庭森・中庭森・下庭森（かみにわもり・なかにわもり・しもにわもり）**

江戸時代の村絵図に「字庭森」とある。一八八四年の地籍図では「字上庭森」・「字中庭森」・「字下庭森」に分かれる。イワイモリ（祝森）から転訛したニワモリで、田の神・山の神など農耕儀礼に因むものを祀ったためと考えられる。モリは杜にも通じ開墾前は樹林地で、田の神・山の神が祀ってあった（『大口町史』）。

#### ○下小口七丁目

##### 新田（しんでん）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字岡田塚」の範囲にあたる。

##### 新田前（しんでんまえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字岡田塚」の範囲にあたる。

##### 東樋田（ひがしといだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字八升田」の範囲にあたる。

##### 西樋田（にしといだ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字八升田」の範囲にあたる。

##### 植松（うえまつ）

江戸時代の村絵図で確認できる。

#### ○竹田一丁目

##### 下島（げしま）

江戸時代の村絵図で確認できる。『尾張徇行記』に下小口内の集落のひとつとして「下嶋」とあり、「竹田」・「下島」・「野田野」あたりは砂地で茶圃が多いと記載されている。シマは川沿いの耕地の意味がある（『日本の地名』）。

##### 下島前（げしままえ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字下島」の範囲にあたる。「下島」の南西に位置するので「下島前」。

##### 下島東（げしまひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字薬師浦」の範囲にあたる。「下島」の東に位置する。

##### 西流（にしながれ）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図

では「字薬師浦」の範囲にあたる。余野地区から流れ込む川（現昭和用水）が由縁と考えられる。

### 野田野山（のたのやま）

江戸時代の村絵図に「字野田野」とある。一八八四年の地籍図で確認できる。

### 乗船（のりふね）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字薬師浦」の範囲にあたる。深田であるから、船に乗って農作業をしたのに因む地名であろう（『大口町史』）。また、音読みでジヨウは畑・山の意味、センは山の意味（『日本の地名』）。この地周辺は、地籍図・村絵図ともに雑木林と畑になっており、田は少し南側に展開する。

## ○竹田二丁目

### 東水砂野・西水砂野・下水砂野（ひがしみさの・にしみさの・しもみさの）

江戸時代の村絵図に「字水砂野」と確認できる。一八八四年の地籍図では「東水砂野」・「西水砂野」・「下水砂野」に分かれていたことが確認できる。段丘の下に

立地する低湿地であった。

### 伏部（ふすべ）

江戸時代の村絵図で確認できる。燻<sup>ふす</sup>べる（燃やして煙を立てる）のフスベで、焼畑畑作地であったことを示す地名と考えられる（『大口町史』）。村絵図・一八八四年の地籍図では、畑となっている。

### 堂軒（どうのき）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字伏部」の範囲にあたる。地籍図では畑になっている。ドウは堤や土手の意味の塘の転訛で、軒は緩傾斜の土地を意味する（『大口町史』）。

### 野田野東（のたのひがし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では「字野田野」の範囲にあたる。

### 野田野（のたの）

江戸時代の村絵図で確認できる。ノダ・ヌタは、湿地を表す（『日本の地名』）。『尾張徇行記』に下小口内の集落の一つとして「野田野」と書かれている。

### 吹野・西吹野（ふきの・にしふきの）

江戸時代の村絵図に「字吹野」と書かれている。一八



八四年の地籍図では「吹野」・「西吹野」に分かれていたことが確認できる。フキが転じてフケは深田・低湿地の意味がある（『日本の地名』）。

### 山王田（さんのうだ）

江戸時代の村絵図で確認できるが、「字水砂野」の東に書かれているため位置が異なる。集落共有の林野を「野散」・「散野」と呼んだところから、散野に山王の字があてられた（『大口町史』）。

### ○竹田三丁目

#### 野田野西（のたのにし）

一八八四年の地籍図で確認できる（竹田二丁目「野田野」参照）。

#### 西乗船（にしのりふね）

一八八四年の地籍図で確認できる（竹田一丁目「乗船」参照）。

#### 彦市（ひこいち）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では、大屋敷村字吹野あたりと考えられる。ヒコには、田畑が出張った所という意味がある（『日本の地名』）。

### 竹田（たけだ）

江戸時代の村絵図で確認できる。『尾張徇行記』に下小口内の集落の一つとして「竹田」と書かれている。タケ（岳）に崖の意味があり、タケダは、やや高いところを意味する（『日本の地名』）。

#### 竹田東・竹田西・竹田浦（たけだひがし・たけだにし・たけだうら）

江戸時代の村絵図では「字竹田」の範囲にあたる。一八八四年の地籍図では、その周囲に東・西・浦（北の意味）を頭に付けた小字として確認できる。一九八一年の境界変更により、竹田西・竹田浦の一部を江南市へ編入した。

#### 大御堂腰（おおみどごし）

一八八四年の地籍図で確認できる。江戸時代の村絵図では大屋敷村字竹田前あたりと考えられる。一九八一年の境界変更により、一部を江南市へ編入した。

【参考資料】

〔村絵図・徳川林政史研究所蔵〕

- 「丹羽郡伝右衛門新田絵図」〔庄屋喜左衛門、頭百姓重兵衛〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡長桜村絵図」〔庄屋鈴木甚三郎、頭百姓嘉右衛門〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡宗雲新田絵図」〔庄屋幸吉、頭百姓伴左衛門〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡宗雲新田絵図」〔庄屋幸吉、頭百姓伴左衛門〕 一八四五（弘化二）年
- 「丹羽郡八左衛門新田絵図」〔庄屋良右衛門、頭百姓幸吉〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡長桜替地新田絵図」〔庄屋伊右衛門、頭百姓平左衛門〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡御供所村絵図」〔庄屋社本伴左衛門、組頭桂作〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡御供所村絵図」 年代不明
- 「丹羽郡九郎右衛門新田絵図」〔庄屋社本伴左衛門〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡小折出新田・又助新田絵図」〔庄屋土田弥十郎、頭百姓仲八〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡三右衛門新田絵図」〔庄屋伊右衛門、頭百姓嘉藤治〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡大屋敷村絵図」〔庄屋甚吉・三九郎〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡稻木庄大屋敷村絵図面」 年代不明
- 「丹羽郡外坪村絵図」〔庄屋和吉・同断伊右衛門、組頭増平〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡河北村絵図」〔庄屋歌右衛門・同断浜蔵、組頭円蔵〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡河北村絵図」〔庄屋歌右衛門〕 一八四五（弘化二）年
- 「丹羽郡余野村絵図」〔庄屋正作、組頭三郎治〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡小口村絵図」〔庄屋締役酒井孫八、庄屋市郎右衛門・同断伊三八・同断甚作、組頭新作・同良助〕 一八四一（天保十二）年
- 「丹羽郡小口村御見取所御定納米場所絵図面」〔庄屋金八・同断前田繁右衛門・同断近藤甚吉〕 一八六三（文久三）年
- 「丹羽郡小口村御見取所図面」 年代不明

(地関図・愛知県公文書館所蔵)

- ・「丹羽郡秋田村」一八八四(明治十七)年
- ・「丹羽郡豊田村」一八八四(明治十七)年
- ・「丹羽郡大屋敷村」一八八四(明治十七)年
- ・「丹羽郡外坪村」一八八四(明治十七)年
- ・「丹羽郡河北村」一八八四(明治十七)年
- ・「丹羽郡余野村」一八八四(明治十七)年
- ・「丹羽郡小口村」一八八四(明治十七)年

- ・中根洋治『愛知の地名』(風媒社、二〇一二年)
- ・柳田國男『地名の研究』(講談社、二〇一五年)
- ・鏡味完二『日本の地名』(講談社、二〇二一年)

(地誌・自治体史など)

- ・大口村役場『大口村誌』(一九三五年)
- ・帝國市町村地圖刊行会『大口村土地寶典』(一九三八年)
- ・大口村役場『五十年の歩み』(一九五六年)
- ・帝國市町村地圖刊行会『大口町土地寶典』(一九六四年)
- ・名古屋市教育委員会『名古屋叢書続編 第一卷 寛文村々覚書(上)』(一九六四年)
- ・名古屋市教育委員会『名古屋叢書続編 第六卷 尾張徇行記(三)』(一九六六年)
- ・愛知県郷土資料刊行会『尾張國地名考』(一九七〇年)
- ・大口町史編纂委員会『大口町史』(大口町、一九八二年)

